

百年クラス會と名づけて記念制作を行ふこととなり海軍班は早くも海をテーマに七尺五寸に七尺の百五十號の大作を描くことに決定、三日から二週間千葉縣勝浦町漁村道場に立籠り朝晩は道場生と同じく修練して海洋魂を養つた上、書間は素材を集め、魂を打込んだ『海』の繪を描く、道場へ立籠るのは

大柳龍男、益田卯咲、藤本東一^(良)、益永端、中江泉、榎松正利、山尾平、田中芳郎、臼田輝四郎、元田乾行、乙葉統、森井龍起

の諸君で海軍省軍事普及部から高橋中佐が指導のため同行する、共同制作は六月一杯に完成、八月十一日から一週間府美術館に飾つた後海軍省に獻納されるが、廿九日午後三時から芝水交社に集まつた一同は

従來海に關する繪畫は極めて少いので今回は波だけをテーマとした新しい繪を作り上げたい

と張り切つて語つた、なほ陸軍班も同じく共同制作の上南京の司令部〔他紙には司令部將校集會所とある〕へ獻奉する筈

油画科では昭和十一年卒業のクラスが城信義追悼のために共同制作をした例(隔頁)があるが、今回の制作は進んで国家に奉仕しようという氣持を表したもので、百五十号の海に因む繪と陸に因む繪とを海軍班と陸軍班とが一点ずつ制作した。前者は怒濤を描き、後者は「初夏の子供」と題し、子供たちが輪になって遊んでいる穏やかな情景を描いたもので、前者の下図を描いた藤本東一良氏によれば、ともに写實的な作風で、軍から費用を支給されたとは言え、士

氣を鼓舞するための戦争画ではなく、銃後の人を慰めるために描いたもので、しかも、誰から指示、指導されたのではなく、生徒たち自ら発案し、完成させたものだという。作品の所在は不明であるが、新聞には次のように報じられている。

結ぶ若き彩管の精進

合作畫『初夏の子供』獻納

今春東京美術學校油畫科を巣立つた青年美術家達が結成してゐる『二六〇〇會』では意義深い年に卒業したことを記念するため陸軍獻納畫の共同制作を冀ひ、去る三月卒業以來精進してゐたがこの程完成、廿二日正午陸軍省恤兵部に出頭獻納の手續をとつた、この獻納畫に心身を打込んだ若人は

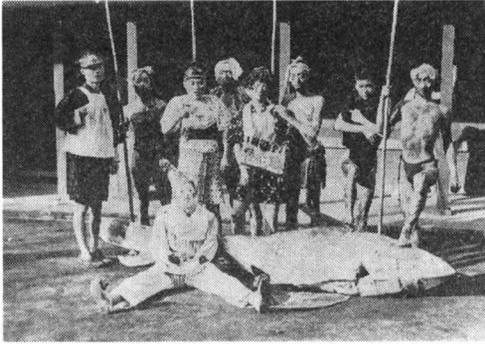
大澤正夫、本城正、興梧武、藤本東一良、大柳龍男、乙葉統、小野田弘彌、金子徳衛、竹澤基、益永端、宮河久、淺井堅治の十二名

で童林社小林萬吾畫伯の熱心な指導の下に各自が彩管報國の精神をこめて従來のモニタージニ式を排しタブローの形を持った共同制作『初夏の子供』を完成したもので陸軍では非常に感激し早速南京總司令部に送り劇務に疲れた將兵の眼を、心を慰めることゝなつた

なお海軍には既報の如く同様『怒濤』が獻納された

(昭和十五年七月二十三日『報知新聞』)

⑮ 皇紀二千六百年祝典



同 油画子科の「海の幸」(同)



運動会仮装競技スナップ
抜群の出来だった油画科上級生の「克蘭
ドル一族(レンブラント、サスキヤ、法王、
僧侶外)」
(鶴飼毅氏提供)



同 漫画競争(同)



同 彫刻科の「ピラミッドとラクダ」(同)

前出『振りかえってみると』に権田竜太郎は次のように記している。

皇紀二六〇〇年祝典

式場へ入る通路の警戒陣のものしき

(皇紀二六〇〇年式典、宮城前広場)
(昭和十五年十一月十一日)

右側に、軍刀をさげ、ピストルを肩からさげた憲兵：
左側に……サーベルをさげた警察官の立ちならぶ中を
我々学生代表は一列になってはるか前方の式場へ入る。
両側からとびつきそうな目と、かみつきそうなくちをし
た警戒陣では、ただとおるだけでもオド／＼してしまっ
て、何ともあわれ……。美校代表 本科二年22才

日本中のあらゆる団体の代表者が、ここ皇居前広場に
集り、盛大に行われた。天皇、皇后両陛下、各宮殿下も
……内閣諸大臣も わが美校からも学年からそれ／＼一
名(計五名)が代表として参加……

お祝いの歌詞が長くて覚え切れないので紙にかいて前
の人の背に吊した。当時この広場のことを宮城前といっ
た

なお、「皇紀二千六百年」を記念して本校ではこの年中
二月二日に運動会が開かれ、余興の仮装大会には各科が腕
を振るった(写真参照)。「振りかえってみると」にはその
様子も記されている。